

平成三〇年度

## 帰国生入試 問題（国語）

### 注意書き

- ・ 試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・ 解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・ この冊子には問題が一ページから一八ページまであります。万一、足りない部分があつたり印刷が見にくい場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・ 解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・ 字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・ 解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

一、次の文章を読み、後の問い合わせに答えなさい。

雪まじりの日だった。得意先での打ち合わせを済ませ外に出たら雨は雪になっていた。夕方からみぞれの予報が的中した。駅まで歩くうちに靴はすっかり濡れて靴下まで湿っていた。<sup>1</sup> 売店に吊された安物を買いホームのベンチで穿き替えたその日のことを平山は忘れない。着ていたコートの色から会議の内容までその後の出来事とセットになつて、すべてが必然でつながれたこととして憶えている。もし打ち合せが早く終わるか延びるかしたら、靴下を穿き替えず一本前の電車に乗つたら何も起きなかつたのだ。

赤ん坊は蓑虫のようショールにくるまれ深々と毛糸の帽子を被せられていた。出ているのは目と鼻先だけで口はマフラーに埋もれていた。乗車してすぐに気づいたが人形と思つた。しかし網棚に目がいつたということはどこか普通とは違う氣配を感じ取つたのではなかつたか。荷物があつてのせようとしたのでもなかつたから自然に目が向いたのだ。

もしやと目を離さずにいるともぞもぞ蠢いているようでもあつた。むずかる声こそしなかつたがショールの下で手だか足が伸び縮みしていた。<sup>2</sup> 一駅三駅過ぎて予感がし始めた。予感はあつた。ピンクのショールでぐるぐる巻きにされたその物はそこに捨て置かれたのだと。<sup>3</sup> 断定をためらつていたのだ。脈が速くなり身体が熱くなつた。穿き替えた靴下も湿り始めていたがそれどころではなかつた。その場を離れることが咄嗟に浮かんだ。判断保留のままそれとなく親らしき者を探した。席についている者吊り革の客を見渡すがそれと思しき者は見当たらなかつた。捨てられたのだ。その場を去る考えが消えぬまま、それを打ち消すためにだつたか、平山は横に立つていた女に声をかけた。どうすべきか彼女も迷つてたところで、抱き降ろすと親と思つたか手足をばたつかせ切れ長の目でふたりの顔をまじまじと見た。<sup>4</sup> 立ち去ろうとした自身の誘惑が封じられたことに平山は安堵し、女は人差し指で目やにを拭い尻のあたりに鼻をつけた。

「ちょっとくさいかな、ね？」

「臭いますね」

「女の子」

「声をひそめて女は言つた。

4 「親がいないか確認したほうがいいんじゃないかしら、その前に」

5 「次で降りるか車掌さんを呼ぶか、どうしましよう、車内のことだからまず車掌？」

平山が問いかける。

「次で降りるか車掌さんを呼ぶか、どうしましよう、車内のことだからまず車掌？」

なさそうだった。平山のコートにくるみ女はその子を胸に抱いた。

6 「親がいないか確認したほうがいいんじゃないかな、ね？」

「声をひそめて女は言つた。

もう一度車内を見回した。誰もがその子の親に映つた。目を伏せあるいは寝た振りで無関係を装えば装うほどみんな疑わしかつた。隅の座席でひろげた夕刊に青ざめた顔を埋める男など子を捨てた父親そのものであつた。注がれる平山の視線にいつそう紙面を顔に引き寄せた。となりで手提げ袋を握りしめ、しきりに瞬きをするひつめ髪の女は母親に相違なかつた。自ら手をあげ名乗り出ているに等しい佇まい。<sup>A</sup> 年格好もあつてた。井桁模様の手提げには哺乳瓶とおむつの替えが入つてゐるのだ。席についている者も吊り革につかまる者も嫌疑を免れんと身をかたく縮めていた。疑えば切りがなかつた。英単語カードをめくる女子高校生から詰め襟の中学生までが怪しかつた。嫌疑はランドセルの小学生にまで及んだ。だが冷静な目に戻れば親と思しき女も男もいなかつた。夕刊を読む男のとなりには手提げ袋を膝に置く女が俯き加減に座つてゐるだけで、高校生は高校生、中学生は中学生であつた。もちろん、小学生も。

バスの車掌と名乗るその女がてきぱき書類に記入する間、眠りかけた小さなしかしこんな重みのある身体を抱き、子の親のように平山はストーブの前に立つてた。寝顔を覗き込めばことの重大さがじわじわ押し寄せ、偶然保護しおそらくその場限りのことなのに生涯逃れ得ない責務を負つたかのような心地がした。すでに姓名を名乗つてしまつた、出された書類に住所も記入した。押印も押した。<sup>B</sup> 素性はすべて明かしてしまつた。逃げようはなかつた。

（中略）

平山の乗車駅を女が訊いた。彼女はそのふたつ前の駅から乗つていたが、その時赤ん坊には気づいていない。ふたりの記憶からはいつ網棚に置き去られたのかという肝心のことは割り出せなかつた。電話を終えた駅長にその不明を伝えると、推測は抜きでお分かりの範囲でお書きください、そう答へが返つてきた。駅長は再びどこかに電話をかける。すでに状況が分かっている相手のようではい、そうですね、ええ、そのようですが、では早急に、とあちらの質問に駅長が答える様子。手持ち無沙汰に立つていた若い警察官が彼女の指示で粉ミルクとおむつを買いに走ろうとする。その背に停留所名を告げるかのように「薬局ですよ」と張りのある声が念を押した。声を出し慣れている人の声だつた。

身元が判明しそうなもの、親からの手紙も、食べる飲むなど最低限の事柄についてのお願いめいたメモさえその子は身につけていなかつた。服に縫いつけられてもしていいか調べたが見つからなかつた。どこの誰か連れぬよう周到に手掛けりを剥がれ捨てられたのである。考え抜いた末のことと思われた。のちに知ることだが、足の裏に、まだ土踏まずのできていない柔らかく膨らんだところに三文字の名が書いてあつた。服の表裏は調べたが靴下までは脱がせなかつたので見逃したのだつた。<sup>7</sup> 手掛かりはすべて剥ぎ取つたものの、名まで奪うのは忍びなかつたのだろう。

(中略)

書類にはふたりの氏名住所に加え勤務先も記入させられた。平山の勤め先を知り、最近までその前を通る路線に乗つていたと女は言つた。ワンマンカーの時代になつてはいたが車掌の乗るバスも一部にまだ残つていた。会社の斜め前に停留所があり利用する機会は頻繁にあつたから、彼女のバスに乗り合わせたのも一度や二度ではなかつただろう。「薬局ですよ」の声に聞き憶えがあるような気がした。

「こうしておふたりに保護されたことが幸せの出発になるよう願うばかりです」

帰り際に駅長が言つた。C月並みではあつたけれどそのとおりだつた。その場にいた者全員の気持ちが言い尽くされていた。

つけ足す言葉はなかつた。

荷物同然に放置された子の幸せに至る道を、駅長の願いの先に平山は思い描いた。<sup>8</sup> 長い真っすぐの道が浮かんだ。緩やかな起伏と横に逸れる小道、遠くに山並みと白い雲を平山は描き足し、わたしもと女がバス停を加えた。その道を行く少女の姿をふたりは想像した。少女を乗せて走るバスを想像した。

「車内のどこから親が見ていたような気がしませんか。拾われるのを見届けるなんてわたしはとてもできなけれど」

目と鼻の先にとなり駅を望むホームを歩きながら女が言つた。

「連れて降りる前にみなさんに尋ねるべきだつたでしょか、親がいたとしたら名乗り出たかもしれないでしょ、最後の最後後に考え直して、わたしだつたら手をあげるような気もするんだけど。違いますね、捨てるなんてよほどのことだから決断がくつがえるはずはないな、ないない」

(川崎徹『あなたが子供だった頃、わたしはもう大人だった』)

- ④ むずかる…子供の機嫌が悪く、泣いたりすねたりすること。  
嫌疑を免れん…疑われないようにしようという意味。  
押印…親指の裏に朱肉をつけてハンコの代わりに押す印。

〔設問〕

問一 線部A～Cの意味として適当なものを一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 「仔まい」

- ア すましている態度。  
イ 動搖している気配。

ウ 何となく立っている姿。

エ にじみ出ている雰囲気。

B 「手持ち無沙汰」

- ア することがなくて退くなさま。  
イ 自信を持つて堂々としているさま。  
ウ おろおろして申しわけなさそなさま。

エ 状況を理解して待ち構えているさま。

C 「月並み」

- ア 単純なこと。  
イ ありふれたこと。

ウ 難しいこと。  
エ たやすいこと。

問二——線部1「売店に吊された——忘れない」とあるが、ずいぶん前の「その日のこと」を平山が鮮明に憶えているのはなぜか。本文全体の記述をふまえて、適當と思われる理由を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア その日はさまざまな条件が重なって最終的に面倒な出来事に自分が巻きこまれることになった日で、今でもその偶然をうらめしく思っているから。

イ その日に自分がとった行動は人の命を救つたという点で印象的なものであり、その後の人生でもそれほど誇らしいと思える行動をとったことはないから。

ウ その日は不思議なめぐり合わせで、ある人間の一生に関わるような重大事に自分が深く関係することになる印象的な出来事のあつた日だから。

エ その日に起きたことは雪が降つたからこそ起きた出来事だったので、その後も雪の降るたびに何度も繰り返し思い出すことになったから。

問三——線部2「断定をためらっていたのだ」とあるが、平山が「断定をためらっていた」のはなぜか。その理由として適當なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 赤ん坊が網棚に捨てられていると断定することで、普通とは違う気配を感じながらずっと赤ん坊を放置してきた罪悪感に苦しむことになると思ったから。

イ 赤ん坊を網棚に置き去りにしたのが親だと断定することで、我が子を親が捨てるということが現実に起きた出来事だと認めることになると思ったから。

ウ 網棚に捨てられているものが人形ではないと断定することで、発見した者の責任としてそれを残してその場から立ち去ることができなくなると思ったから。

エ 網棚に置き去りにされたのが赤ん坊だと断定することで、その捨て子をこれからどうするかという問題に自分が巻きこまれることになるとと思ったから。

問四——線部3「立ち去ろうとした自身の誘惑が封じられたことに平山は安堵し」とあるが、平山が「安堵し」たのはなぜか。その理由として適當なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 協力者を得たことで一人で赤ん坊の世話をするという重荷から解放されたから。

イ 赤ん坊を見捨てた後に生じるであろう後ろめたさを感じる心配がなくなつたから。

ウ 立ち去るかどうかの迷いがなくなり自分が赤ん坊の面倒を見ればよいと分かつたから。

エ 赤ん坊の親を探したいという最初から持ち続けてきた思いをかなえることができるから。

問五——線部4「声をひそめて女は言つた」とあるが、「女」が「声をひそめ」たのはなぜか。その理由として適當なものを次のの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大声で騒ぎ立てる、まだその場にいるかもしれない赤ん坊の親が、名乗り出たくてもかえつて名乗り出にくくなるのではないかと思ったから。

イ 大きな声を出して赤ん坊に泣かれでもしたら、周囲の乗客たちに臭いの原因が分かつてしまい、自分たちが注目されることが心配だつたから。

ウ 赤ん坊が捨てられるなどという重大事件は、周囲の乗客に気づかれないうちに車掌に通報して、すぐに解決してしまつた方がよいと思ったから。

エ 赤ん坊の本当の親を一刻も早く見つけたいとは思うものの、どうしたら探し出せるのか分からなくなり、探す自信がなくなつてしまつたから。

問六 線部5 「誰もがその子の親に映った」とあるが、平山の目にこのように映ったのはなぜか。その理由として適当なものを次のの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他の乗客たちは捨てられた赤ん坊とは無関係だと訴えてくるような態度を取つており、かえつてその態度が疑わしいものに思えてきてしまったから。

イ 赤ん坊と接するうちに我が子のように大切に思い始め、赤ん坊を親元に戻してあげたいという気持ちが強くなりすぎて冷静さを失しなつてているから。

ウ 赤ん坊を電車の網棚に捨てて、他人に世話をしてもらおうという無責任な親に腹が立ち、見つけ出して文句を言つてやらなければ気がすまなかつたから。

エ 赤ん坊の親がまだ電車内にいる可能性に改めて気づかされ、早く赤ん坊の親を探さなければならないと焦る気持ちにひどく取りつかれているから。

問七 線部6 「眠りかけた小さなーストーブの前に立っていた」とあるが、この時の平山の気持ちの説明として適当なものを次のの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 赤ん坊に対して重大な責任を背負つてしまつたことに気づき始め、自分の手で赤ん坊を育てていくしかないと思つてゐる。

イ 眠りかけた赤ん坊を抱きかかえているうちに、この赤ん坊の命がずつしりと自分の手に委ねられていることを実感している。

ウ 自分の腕の中で眠ろうとしている小さな赤ん坊を見て愛おしさを感じ、今日だけでも親のように愛情を注いであげたいと思つていて。

エ 赤ん坊を保護したことで今後も続くきずなが生まれてしまい、もう逃げられなくなつたことに気づき、困り果てて立ちつくしている。

問八 線部7 「手掛かりはすべて剥ぎ取つたものの、名まで奪うのは忍びなかつた」とあるが、本当の親がそうしたのはなぜだと考えられるか。その理由として適当なものを次のの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 赤ん坊は捨てざるを得なかつたものの、せめて名前だけでも残しておけば、拾つた人が赤ん坊を大切に育ててくれるに違いないと思つたから。

イ 赤ん坊の親探しの手掛かりはすべて消し去ることができたと考えたが、足の裏に名前を書いておいたことまでは忘れてしまつていたから。

ウ 赤ん坊の親探しができないよう身元の分かるものはすべて消し去ろうとしたが、自分とのただ一つのつながりとして名前だけは残しておきたかったから。

エ 赤ん坊は自分を捨てた親のことを将来うらむに違いないが、自分の靴下に名前を書いてくれたことを知れば、少しは親に恩を感じてくれるかもしれないから。

問九 線部8 「長い真っすぐの道が一平山は描き足し」とあるが、筆者はこの「想像」によって平山のある願いを表現していると思われる。それはどのような願いか。次の二つの言葉を必ず用い、解答欄にあてはまる形で七〇字以上、九〇字以内で書きなさい。

少女の人生 捨てられる

問十——線部9「連れて降りる前に——ないない」とあるが、この時の「女」の気持ちの説明として適当なもの次のなかから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 電車の中に少女の親がいたのならば普通は名乗り出で当然だろうと怒りを感じつゝも、我が子を見捨てるような親にそれは期待できず、少女のためにしてあげられることはもうないだろうと考えて切なくなつていて。

イ 電車の中には少女の親がいたはずなのだからもつと念入りに調べるべきだったと反省しつゝも、親があの場では名乗り出ることなどできないので、無理に親探しをしなかつたことはよかつたのではないかと思つていて。

ウ 電車を降りる前にその場でもつと少女の親を探すべきだったのではないかと後悔しつゝも、その気持ちを打ち消すために、たとえ声をあげて探したとしても親は名乗り出なかつたはずだと自分に言いきかせようとしている。

エ 電車を降りる前にその場にいたであろう少女の親が名乗り出なかつたことを悲しいと感じつゝも、その悲しみをまぎらわせるために、親が声をあげられなかつたのはよほどの事情があつたに違ひないと信じこもうとしている。

## 二、次の文章を読み、後の問い合わせに答えなさい。

1 科学者は努力しなくて済むためならばどんな努力も厭いません。そんな彼らの努力が実り、今では、かなり複雑な作業でさえ、人工知能やロボットが代行できるようになつてきました。

世の中が便利になる一方で、新たな仕事も生まれます。たとえば、ウェブデザイナーや情報セキュリティマネージャー、ビッグデータアナリストは、私の幼少時代にはなかつた職種です。

オックスフォード大学のオズボーンハカセ<sup>a</sup>らは、将来消えてなくなる職業をシミュレーションしています。スポーツ審判、不動産ブローカー、カジノディーラー、会計監査、測量士、各種受付窓口など、多岐にわたる職業が「絶滅危惧職」と判定されました。

デューク大学のデビッドソンハカセ<sup>a</sup>は、「いま小学校に入学した子どもの65%は、大学卒業時に現在は存在していない職業に就く」と予想します。となれば、子どもたちが「将来の夢」と称して、就きたい仕事を語ることにどれほどの真実味があるのでしようか。夢を持つことは、現在存在する35%の仕事に、自分の可能性を閉じ込める意味なのです。

教育の方も問われてきます。情報化が進むにしたがつて、私たちの働き方は、知識や技能を身につけるよりも、そうした知識や技能を生かす「知恵」へと、軸足が移っています。

芸術創作は知能ロボットがいまだ苦手とする領域です。しかし、そう遠くない将来、巧みに模写する画家ロボットや、気の利いた表現を紡ぐ詩人口ロボットが現れるはずです。現に一部では、それが実現化しつつあります。もしかしたら、ヒトの脳の快感系をコウリツ<sup>b</sup>よく刺激するメロディや歌詞をスランプなく連発できる作曲家や作詞家や、舌の味覚を最大限に満足させる創作料理人のロボットが現れるかもしれません。

(中略)

いずれにしても、ヒトの知能が礼賛される時代は、そろそろ終焉を告げるでしょう。これは運動能力がたどつた経緯と同じです。江戸時代は足が速ければ職がありました。しかし今は、かけっこがクラスで一番だからといって有名企業に就職できるわけではありません。車や飛行機のほうが速いからです。

これと同じことです。いずれ知能はブランドではなくなるでしょう。人工知能のほうが賢いからです。企業は、知能指数の高い人よりは、むしろ、人工知能と上手に付き合うことのできる「機械との対話能力」の優れた人を採用するはずです。

人工知能といかに共存できるか。そして、その新たな世界にいかに順応できるか。  
火、農耕、車輪、貨幣、文字、火薬、印刷、羅針盤、蒸気機関、電気——。これまでも人類は自ら発明した技術によつて、人類そのもののあり方を変革してきました。まさにこの現代も、人工知能の開発を通じて、こうした過去の変革に匹敵する大転換期を迎えているのだと思います。

この大転換期のポイントは「共存」です。ヒトと人工知能ががっぷり四つに組むということです。

そもそもヒトはなぜコンピュータを作ったのでしょうか。その原点を忘れてはいけません。理由はヒトに不足した能力を補うためです。計算や記憶は、人間は必ずしも得意ではありません。これを代行させるために、人はコンピュータを開発し、そして丁寧に育んできました。そんな我が子が、想定より早くリップに成長したからといって、その能力に嫉妬し、対戦しようと考えるのは滑稽です。

昨今のように将棋や囲碁で勝負しようなど、かつて人類がコンピュータを熱心に開発しようと苦心した「初心」を考えれば、滑稽にも思えます。

4 昨今のこうした傾向を見るにつけ、おそらくヒトの最大のシツサクは「ヒトらしさとは何か」を勘違いしていたことにあると思います。ヒトならではの能力はと問われると、つい、創造、芸術、直感、気遣いなどの側面を挙げがちです。

理由は簡単です。「人間らしさ」を考えるとき、これまでならばチンパンジーとの比較で推測できたからです。チンパンジーにできなくてヒトにできること。——それこそがヒトらしさの本質であると考えていればよかつたのです。こうした生物間の比較に、私たち人類は長い歴史を通じて慣れてきました。

しかし、いまや比較すべき対象はチンパンジーではありません。人工知能も考慮する必要があります。創造、芸術、直感、気遣いなどは、チンパンジーには難しかつたかもしれません、人工知能にとつてはそうではないかもしれません。

(中略)

たとえば、文章ならばすでに上手に書くことができます。アメリカの新聞では、2015年の一年間だけでも、10億本以

上の自動執筆の記事が発信されています。スポーツ記事や経済記事、天気予報が、特に得意な分野です。

たとえば、その日のプロ野球の試合データを人工知能に送信すれば、「7回表にキシカイセイ<sup>e</sup>の満塁ホームランが飛び出しマジック<sup>f</sup>43が点灯。7月にマジックが点灯するのは13年ぶりの快挙である」などという記事は、人がわざわざデータブックを検索しなくとも、人工知能が過去のデータを参考に、「機械的」に作文することができます。

最近では、新聞記事だけでなく、詩を書くことのできる人工知能もあります。2015年には人工知能が書いたシェイクスピア風の詩を、本物のシェイクスピアの詩と並べ、それが偽物かを当てるコンテストが行われました。その結果、人工知能の作った詩は、有識者でも区別することができないほどのレベルにあることがわかりました。

人工知能の芸術的才能は、最近では、音楽や絵画にまで広がっています。こうした背景を受け、2016年にマサチューセッツ工科大学は「人工芸術はヒトの創作性に疑問を投じる」と題したレビューを発表しています。

たとえば音楽。樂理の教科書を読めばよくわかります。ヒトが「心地よい」と感じることのできるメロディや和音は、比較的のパターンが限られています。人工知能はそうした「ヒトの心のツボ」を突いた曲を機械的に作り出しているわけです。

この事実は、逆に人工知能の立場に立てば、次のように挑発的に解釈することができます。「音楽とはかくも多彩な可能性に満ちた豊穣な芸術世界である。ところがヒトの脳ときたら、なんと「見えない」限られたパターンしか気持ちいいと感じないようだ。ためしにヒトの快感ルールに則つて曲を作つてやろう。ほら、やっぱり予想通りに喜んでいるよ。ヒトの脳はわかりやすいほど単純だ」——。

ヒトは自分の「心」が深遠で神秘的なものだと考えています。しかし、本当にそつかは、ヒト自身には捉え切れないところがあります。<sup>6</sup>もしかしたらヒトの心を一番理解できるのは、ヒトではなく、人工知能である可能性さえあります。

(中略)

よくよく考えれば、もてなしや気回しなどの「気遣い」は、作業としては恐ろしく機械的です。気が利くか否かも十分なセンサーを取り付ければ解決できる問題です。つまり、創造、芸術、直感、気遣いは、決してヒトならではの牙城ではなく、私たちヒトが安易に想像するよりも、はるかに簡単に人工知能によつて代替されてしまう機能なのかもしれません。

こうした近年の躍進から、「人工知能は人間の仕事を奪う」と恐れる人がいます。繰り返し言います。こうした考え方こそ

が、人工知能を敵視する誤った姿勢なのです。

現代は、ちょうどイギリスの産業革命の時代に似ているといわれます。当時は蒸気機関の技術革新に伴い、多くの人が失業を恐れました。しかし、実際には失業したのではなく、新たに生まれた雇用に伴って「転職」したのです。日本もかつて似た経験をしています。明治維新です。江戸時代は90%近くの人々が農民でしたが、現在までに多くの人が転職しました。いま直面している状況は、これに似ています。

自動運転技術が確立されればタクシードライバーは必要なくなるかもしません。自動もてなし装置ができれば窓口業務は必要なくなるかもしません。同時翻訳機が完成すれば英語の授業は必要なくなるかもしません。しかし、どれほど人工知能が進歩しても「人のすべきこと」「人ならではの作業」は残るはずです。当然、そこには新たな雇用が生まれるはずです。もちろん今後も残るであろう職種についても、時代相応の対応が求められます。そんな未来を予言するのが、いまの将棋や囲碁の棋士たちの姿です。いまやプロの公式戦で出る新しい手はコンピュータソフトから得たものがほとんどです。つまりプロ棋士が人工知能に「教えを請うて」というわけです。なぜなら将棋や囲碁はヒトには難しすぎるゲームだからです。これと同様で、一般的の職場でも、いずれ似た現象が生じるにちがいありません。人工知能のほうがヒトよりも合理的な判断をする可能性があるからです。

となれば、キーワードは「共存」です。今後は、各個人が人工知能と独自にタッグを組む時代になるでしょう。もちろん現場で職務を担当するプレイヤーはヒトです。つまりヒトは、「職場」という舞台で人工知能の描いたシナリオ通りに演じるプロの「役者」となるのです。その魅惑的な演技力に観客（雇用者）は観劇料（給与）を支払う——。そんな世の中になつても不思議ではありません。

私自身も人工知能を用いた研究をしています。しかし正直に告白すると、人工知能が将来どういう方向に、どこまで発達していくかを、現時点では読み切ることはできません。つまり、「ヒトならではの仕事」を現時点では予測できません。むしろ今後、人工知能が発達してゆくことによって、ようやく「ヒトらしさとは何か」という疑問に対しても明確な答えが得られてゆくのだと思います。

(池谷裕一『できない脳ほど自信過剰』)

㊂ マジック：他のチームの試合結果にかかわらず、その数だけ勝利すれば優勝できる勝ち数のこと。

レビュー：評論・批評・記事のこと。

樂理：音楽の理論。

豊穣：物事が豊かな様子。

牙城：ある組織・集団の中心となる根拠地。最後のよりどころ。

イギリスの産業革命：十八世紀後半にイギリスから始まった技術革新によって、産業のあり方の変化や経済的な発展が成し遂げられたこと。

〔設問〕

問一 ～～線部a～eのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線部1 「科学者は努力しなくて済むためならばどんな努力も厭いません」とあるが、この一文の説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A はじめは努力しないで済ますことを望んでいたはずなのに、その目的を忘れて必要以上に努力してしまっている科学者の愚かさや滑稽さを、皮肉な表現で批判している。

I 努力を厭わない科学者の勤勉さを強調するために、一文の中で「努力」という言葉を一回も繰り返し用いて成果を上げつつあるその熱心な姿勢をたたえている。

U 努力せずに済ますことを目的として努力するという、目的と行動が一見くい違っているようにも思えるひねった表現を用いることで、読者の興味をひこうとしている。

E 努力したくないという科学者のまちがつた願望が人工知能の研究を加速させ、けつきょく多くの人の職を奪う結果を招いたということを読者に印象づけようとしている。

問三——線部2「夢を持つことは、——意味するのです」とあるが、ここで筆者は何を言おうとしているのか。その説明として適当なものを次のなかから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 将来子どもたちの多くが今はまだない仕事に就くかもしれないのに、今存在する仕事の中から職業を決めてしまって、新しい仕事を自分の職業として考えられなくなったり、自分の就きたい仕事がなくなったりすること。

イ 将来今ある職業のほとんどがなくなってしまう可能性があるのに、子どもたちがそのなくなるかもしれない職業に就くために知識や技能を身につけようとしても、身についた知識や技能はむだになってしまふということ。

ウ 将来今ある職業の多くが新しい仕事に置きかわってしまう可能性があるのに、働き手となる子どもたち自身が過去の伝統を重んじて今ある仕事にこだわってしまうと、現実の変化にうまく適応できなくなるということ。

エ 将来どのような新しい仕事が生まれるかはまだはつきりしないのに、子どもたちが将来就きたい新しい仕事についていくら語つたとしても、実際にその職業が生まれるかどうかは分からないので現実的ではないということ。

問四——線部3「ヒトの知能が礼賛される時代は、そろそろ終焉を告げるでしょう」とあるが、これは「ヒトの知能がほめたえられる時代は間もなく終わる」という意味である。「ヒトの知能がほめたえられる時代は間もなく終わる」と言えるのはなぜか。その理由として適当なものを次のなかから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人工知能が人間の知能を超えると人間の知能の価値はなくなつていき、人間に求められるのは高い知能ではなく、人工知能とうまくやっていく能力となるから。

イ 人工知能が人間の知能を超えると、人間的な知性は必要なくなり、人工知能の仕組みを作り出せる高度な知能だけが人間に求められるようになるから。

ウ 人工知能が発達すると人間の仕事の種類や量に大きな変化が生じ、いつまでも昔の職種にしがみついているような人は企業にとって何の役にも立たないから。

エ 人工知能の可能性は人間の知能をはるかに超えたものとなるので、人工知能によって生まれる新しい仕事に順応できないような人は必要とされないから。

問五——線部4「昨今のこうした傾向」とあるが、それはどのような傾向か。その説明として適当なものを次のなかから一つ選び、記号で答えなさい。

ア コンピュータが人間の能力を超える始めると、コンピュータに敵対意識を抱いて、コンピュータと人間が共存するであろう新たな世界に順応することを拒絶してしまう傾向。

イ コンピュータが人間の能力を上回り始めると、人間に不足した能力を補うというコンピュータの本来の役割を忘れて、将来的にコンピュータが人間を支配するようになることを恐れる傾向。

ウ コンピュータが人間より優れた能力を見せ始めると、人間が苦手とする代わりに行うためにコンピュータは開発されてきたということを忘れて、コンピュータに対抗しようとする傾向。

エ コンピュータが人間の能力を超えるになると、コンピュータに人間の価値を否定されるのではないかと思つて、ヒトにしかできないことを何としてでも見つけ出そうとする傾向。

問六——線部5「『機械的』に作文することができます」とあるが、「『機械的』に作文する」とはどういうことか。その説明として適当なものを次のなかから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 余計な先入観を持たないで検索したデータのみで作文するということ。

イ データ検索における優れた能力を最大限に活用して作文するということ。

ウ 過去のデータを参考して詩のような芸術的な表現も交えて作文するということ。

エ 味気ない表現になつても内容は伝わるように型通りの作文をするということ。

問七 線部6 「もしかしたらヒトの心を—可能性さえあります」とあるが、それはなぜか。その理由として適當なものの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人工知能の方が人間より早いペースで進化する可能性があり、その進化した思考によつてより多彩で豊かな「ヒトの心」のあり様が解き明かされるかもしれないから。

イ 人工知能の方が過去のデータを正確に分析することができ、その分析の正確さによつて深遠な「ヒトの心」を理解することができるようになるかもしれないから。

ウ 人工知能はヒトを自分より下に見るごくまんな考え方を取りがちだが、人工知能による単純な思考の方がかえつて「ヒトの心」を分かりやすく示してくれるかもしれないから。

エ 人工知能の方が人間よりもごとの多様な可能性を想定することができ、その多様な可能性を考慮に入れると「ヒトの心」のあり様がいつそう理解しやすくなるかもしれないから。

問八 線部7 「こうした考え方こそが、人工知能を敵視する誤った姿勢なのです」とあるが、「こうした考え方」が「誤った姿勢」だと言えるのはなぜか。その理由として適當なものを次のものの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人工知能が発達したことによつて人工知能を使いこなす能力が必要となり、かえつて人に今まで以上の負担がかかるようになつてしまふと誤解しているから。

イ 人の代わりに人工知能が仕事をすると人工知能に仕事を奪われたかのように思われるが、実際には新しい仕事の雇用が生まれてゐることに気づいていないから。

ウ 自分が就きたい仕事に就けないのはその人の能力の問題であるのに、まるで人工知能によつて自分の仕事が奪われたかのように考へてゐるから。

エ イギリスの産業革命のような転換期に人の仕事が奪われる時は時代の流れで仕方がないことであつて、決して機械のせいではないことに気づいていないから。

問九 線部8 「人工知能が発達してゆくことによつて—得られてゆくのだと思います」とあるが、人工知能が発達することと「ヒトらしさ」が分かるようになるのはなぜか。発達した人工知能とヒトとの関係が今後どのようになつてゆくかということにふれながら、解答欄に合うように六〇字以上、八〇字以内で説明しなさい。

平成三〇年度 帰国生入試 国語解答用紙 (1)

## 受験番号

氏名

	I
	II
	III
	IV
	V
	VI
	VII
	VIII

解答用紙  
2

合計

◆右のらんには何も書かないこと。

問一  
A  
B  
C

問二

八

問十

平成三〇年度 帰国生入試 国語解答用紙 (2)

受験番号

氏名

小計

	I
	II
	III
	IV
	V
	VI
	VII
	VIII

◆右のらんには何も書かないこと。

問一	
d	a
e	b
	c

問二

問五

問八

問三  
問六

問七  
問四

問九

人工知能が発達してゆくことによつて、

80

60

平成三〇年度 帰国生入試 国語 解答用紙（1）

受験番号

氏名

	I
	II
	III
	IV
	V
	VI
	VII
	VIII

解答用紙  
2

合計

◆右のらんには何も書かないこと。

問十

問九				
い	と	る	も	少
ま	だ	の	女	
つ	ろ	で	の	
す	う	あ	人	
ぐ	が	り	生	
つ	,	,	の	
な	そ	今	始	
が	れ	後	ま	
る	に	と	り	
90 人	く	も	は	
とい う 願 い 。	生	じ	多	捨
	を	け	少	て
	送	る	の	ら
	つ	こ	苦	れ
	て	と	労	る
	い	な	や	と
	つ	く	迷	い
	て	幸	い	う
	欲	福	は	辛
	し	へ	あ	い

問八

問五

問二

問一

問六

問三

問四

問七

問八

平成三〇年度 帰国生入試 国語 解答用紙 (2)

問九			
て	で	工	能
く	き	知	と
る	な	能	共
か	い	と	存
ら	仕	協	し
.	事	力	て
	や	し	ゆ
人	て	か	か
間	ゆ	な	な
80	が	く	け
	す	中	れ
60	べ	で	れ
	き	ば	間
	初	な	は
	こ	め	ま
	と	な	す
	が	人	ま
	分	間	す
	か	に	り
	つ	し	、
	て	か	人
			知

問八
----

問五
----

問二
----

問一	
d	a
失策	博士
e	b
起死回生	効率
c	立派

◆右のらんには何も書かないこと。
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII

受験番号
------

氏名
----

小計
----